

研究余滴

文化行政（Ⅱ活動）の遠因をなす1947年

（総合博物館開館30年に寄せて）

仲宗根 將二

はじめに

戦後宮古の文化活動（Ⅱ行政）を考える上で、一九四七（昭和二二）年の宮古民政府の文化行政は、その後の現在に至る重要な遠因をなす起点である。宮古島市民総合文化祭、宮古島市文化協会、宮古島市総合博物館、文化財保護、市史編さん、少年少女合唱団など、すべて一九四七年に起因し、一九七四年に至って現在の軌道に乗ったといっても過言ではなからう。総合博物館もその延長線上に設立された、と考えている。

1. 歴史に学んで……

「アジア・太平洋戦争」最後の激戦「沖繩戦」では地上戦こそなかったものの、米・英軍の連日の猛爆撃で平良のまちをはじめ、集落の大方は焦土と化し、敗戦後の宮古も「ゼロからの出発」といわれている。沖繩県は崩壊し、米軍全面占領下、国との関係も絶たれた宮古は、「自立」を余儀なくされていた。一九四七年三月、沖繩県宮古支庁は宮古民政府と改称しての再出発である。敗戦で価値体系は一八〇度転回して、物心ともうちひしがれた人びとを鼓舞するために、同年八月、「新宮古建設の歌」を公募し発表している（詞・仲元銀太

郎、曲・豊見山恵永）。

十一月には、宮古文化連盟、「宮古文化史」編さん委員会も発足させている。十二月には同年夏、在京の「おもしろと沖繩学の父」伊波普猷の永眠を悼んで、二十年も前に他界した宮古の歴史家、富盛寛卓と慶世村恒任の二人を合わせて「合同追悼会」を催している。

敗戦と形あるものの大方を失った戦後の再出発に当たって、歴史に学ぼう、との思いを新たにしていたのであろう。

翌一九四八年一月には、事務局を民政府におく文化連盟は「宮古文化」（のち「文化」に改題）を創刊し、六月には、音楽、演劇、舞踊、美術、文芸など各分野からなる初の「芸術祭」を三日間にわたって催している。

2. 現在への胎動

民政府は「楽土建設」を標榜し、中核を担う若ものたちは文芸協会を設立して「文芸旬刊」に拠り、「文化立島」「強力なるジャーナリズムの形成」等を提唱している。まさしく戦後宮古の文芸復興期ともいえるべき「官民」一体となつての大きな胎動である。

現在隆盛をきわめる文化協会、郷土史研究会、二季会、野鳥の会、写真協会ははじめ、文芸、民謡、舞踊など各分野の団体・サークルなどの遠因を成すものともいえよう。そこには当然のことながら現在の活動に直接・間接に影響を与えている多くの特筆すべき先人がおられる。きわめて恣意的だが、次のような方々があげられよう。

文化連盟の中枢には、稲村賢敷、山内朝隆、下地明増、本村武史（玄典）、平良恵仁、新里博一……ら、歴史分野では、稲村賢敷、饒平名（大井）浩太郎、島尻勝太郎……ら、文芸分野では、平良好児（定英）、本村武史、克山滋（大見謝恒全）、平本魯秋（実一）、国仲穂水（寛力）、本村隆俊……ら、美術分野では、本村恵清、池村恒仁、大宜見猛……ら、民謡では、平良彦一、友利明令……ら。戦後初期から宮古史をいろいろと綴々たる人士らである。

一九五〇年代に入ると文芸分野は同人誌に拠る活動がめだつてくる。本村武史、平良恵仁、新里博一……らの「文芸」、松下仁（吉村玄得）、原龍次（松原清吉）、伊志嶺亮……らの「あざみ」（のち「宮古文学」）、一九六〇年代には、宮国泰誠、平良好児、本村武史、与那覇寛長、池村恵興、松下仁、大宜見猛……らの「青潮」（宮古エッセイストクラブ）、伊志嶺亮、もりたかし（友利恵勇）、砂川玄徳、宮沢慶（謝名元慶福）……らの「群」などが出ている。

宮古歴教協の「密牙古」、宮古水産高職員の「つどい」もきわめて意欲的な活動をみせている。俳句会、短歌会も定期的に関わられて地元新聞も積極的に発表の場を提供している。この時期、一般雑誌も出版されるようになり、地元新聞とともに読者に発表の場を提供していることも特筆されよう。「週刊宮古」（宮国泰良）、「週刊先島」（平良重信）、「週刊春秋」（野平恒）などである。

歴史分野では、琉米文化会館（新井禎一―山内朝保―大宜

見猛）や宮古図書館（Ⅱ分館、稲村賢敷―池村恵祐―砂川幸夫）は、積極的に郷土史資料を収集し郷土史講座も開いている。吉村玄得、仲宗根恵三、塩川寛令……らの「文化財を守る会」は史跡めぐりを実施するなど、広く宮古歴史への関心を高めている。

美術分野では、一九五六年春、京都在住の宮原昌茂画伯が一時帰省して戦後初の個展を開き、これを契機に、下地明増、平野長伴、本村恵清、池村恒仁、大宜見猛、川満進、砂川隆之……らの「二季会」が誕生している。

民謡や舞踊の分野はもはや周知のように、数多くの研究所、練場が設立され、沖縄本島に劣らぬほどに隆盛をきわめている。

3. 「博物館」建設へ

このような各面にわたる多彩な活動を背景に、旧平良市は一九七四年四月、教育委員会に初めて課制を導入（総務・指導）し、前年に始まった文化財保護行政を軌道に乗せるとともに、市民総合文化祭、市史編さん事業、少年少女合唱団等を発足させ、市長部局と提携して、宮古まつり、関東・関西ふるさとまつり等も始めている。第二の文芸復興期ともいえる。

市民総合文化祭は、第五回、第十回の二度にわたる総括をへて、一九八四年一月、文化協会が設立されて一般の部を担当し、名実ともに市民主導の市民総合文化祭として発展している。これらはすべて二〇〇五（平成十七）年十月、五市町

村合併にさいして他の四町村の文化行政とともに宮古島市に引きつがれ一層盛況をきわめている。

一九七四年に本格化した文化財保護行政や市史編さん事業では、当初から全市（＝全宮古）的な調査、研究を進める過程で、将来市が施設を持つようになったら提供（寄贈・寄託）してほしいと要請していたが、なかにはいま寄贈したいと申し出る家庭も出てくる。しかしこの段階では引き取っても置き場所さえない。翌一九七五年八月、文化財調査委員会（宮国定徳委員長）から、「平良市立宮古博物館の設立並びにその関連措置について」が提出された。これを受けて市民会館四階中ホールに「郷土資料室」が設けられ、文化財や民具の受け入れ、収集を始めている。さらに一九七九年十一月、二重

越のNHK旧庁舎のスタジオを改装して、郷土資料室を移し、常設の「歴史民俗資料館」とした。一九八六年三月閉館までに担当職員の努力で資料館展五回、資料館講座三回開かれていた。その間、一九八三年十二月には宮古郷土史研究会から「総合博物館準備室の早期設置について（要請）」が提出され、博物館建設は愈々現実味をおびてきた。

一九八四年四月には教育委員会もNHK旧庁舎に移転し、指導課は学校教育と社会教育の二課に再編して、歴史民俗資料館は市立図書館とともに社会教育課の管轄となった。社会教育課は四係構成で、市の文化行政とスポーツを一元的に担当することになる。社会教育係は根間玄幸係長（社教主事）のもと、課の庶務と社会教育全般、社会体育係は下地敏雄係

長のもと、総合体育館と陸上競技場を主体にスポーツ全般、文化係は折田時男係長のもと、文化行政全般並びに文化協会の事務局を一時的に担当した。その傘下の文化財と歴史民俗資料館は引きつぎ砂川玄正主事、企画室に移されていた市史編さんも引きつぎ前里恒次主事、市立図書館は川満進館長で再発足している。

博物館建設は社会教育課担当で本格化していく。市民の意見を反映させる集会も二回開かれ、展示内容、設置場所等が検討されている。設置場所は市街地内とし、中央公民館と総合体育館の間を想定していたが、一九八七年四月、税務課に移ったため、その後は関与していない。同年九月、条例にもとづいて総合博物館準備運営委員会（池間昌彦委員長）が発足し、一九八九（平成元）年十一月一日開館である。当初の陣容は、館長は社会教育課長兼任、専任職員（学芸員）一、兼任職員一、期限付職員四、以上七人。

おわりに

一九九〇年四月一日、博物館に配置替えされた。石積みのみごとな外観には感動したが、玄関に入って正面が企画展示室、常設展の歴史・民俗分野には朝日が入り、美術工芸・自然分野には夕日が入る。展示品への影響はないのであろうか、奇妙な位置づけに違和感をおぼえた。収蔵庫には空調がない。在職中は月二回職員会を定例化し、運営面や企画展をはじめ、博物館を取りまくあらゆる情報の交換の場とした。さらに午前・午後の各二回常設展示室、一日一回は外回りを巡回する

のを日課とした。参観者に求められれば展示品の説明にも当たった。一日四回説明したこともある。

宮古の自然と風土―博物館に行けば宮古のすべてがわかる。地域に根ざし、地域に支えられた総合博物館をめざして、寄贈・寄託者には正規の受領書のほか、可能な限り自筆の礼状を出すよう心がけた。一九九三年四月現在、職員は専任五(館長、学芸三、庶務一)、期限付三、計八人で、同年九月、登録博物館に認定されている。

一九九四年七月、企画室へ配置替えされた。博物館では宮古について、改めて総合的に学び直すことが出来、また、内外の多くの人との出会いは今に至るもつづいている。様々な情報をもたらす人脈は、何ものにも替え難い貴重な財産である。感動多い四年四月に感謝している。

あれから二五年、報道によればその後の博物館は相変わらず陣容は手薄のようだが、歴代館長はじめ、職員の努力によつてめざましい充実発展振りである。心から敬意と祝意を表するものである。今後とも地域に根ざし地域に支えられる総合博物館でありますよう期待しています。

宮古島市総合博物館三十年、おめでとうございませう！

〈付記〉戦後文芸復興期を象徴する「新宮古建設の歌」は、一九九四(平成六)年三月二一日、うえのドイツ文化村に、銀太郎先生の新里小学校(Ⅱ上野小)時代の教え子らによつて歌碑が建立されている(揮毫・古堅宗和Ⅱ清風)。

新宮古建設の歌

作詞 仲元銀太郎
作曲 豊見山恵永

1. はるかな海の彼方から ひたひた寄せる潮の音は
夜明けの港 漲水に 愛と信義を誓う歌
2. 若い血潮は 紅の でいごの花が咲くように
胸にあふれて 新生の 高い理想に躍るのだ
3. 迷いの雲がかかったら 友よいつしよに払いよけ
真澄の月の 清らかな 太平山を築くのだ
4. 苦難の道は続いても スクラム組んで僕たちは
意気高らかに建設の 希望に燃えて進むのだ
5. 嵐に耐えた白百合の 香りも高い新宮古
築く使命を負う友よ 愛と信義に強く立て